『枕草子』の「打聞」考

園山 千里

Sonoyama Senri
Jagiellonian University

1、はじめに

近年、平安時代の物語和歌について考察を進めており、特に和歌が現出する場や状況などに関心があり、様々なテキストからそれらの分析をしている¹。今回は『枕草子』の「打聞」について考えてみたい。「打聞（うちぎき）」とは、聞いたものをそのまま書きつけておく行為で、特に歌を記録しておく場合に使われる言葉である。「打聞」という言葉の初出が『枕草子』であることから、「うれしきもの」章段にみられる「打聞」の解釈をおこなう。また、「打聞」とは「歌語り」とも関連があることから、『源氏物語』や『紫式部集』の「歌語り」とを比較しながら考察していく。人々の賛美や批判を伴う「打聞」や「歌語り」を考えることで、『枕草子』がどのように「打聞」の世界をひろげ、文芸世界を確立していったのか論じていきたい。

¹ 拙稿「『落窪物語』の和歌—法華八講との関連から—」（『第35回国際日本文学研究集会会議録』国文学研究資料館、2011年）、「『落窪物語』における手紙と和歌との考察」（小山利彦編『王朝文学を彩る軌跡』武蔵野書院、2014年）。

2、「打聞」とは何か

辞書的な説明では、名詞である「打ち聞き」は「偶然耳にすること、またその言葉や話」もしくは「聞いたままを書き留めること、またその記録。特に秀歌を集めて書き留めたもの」とある。「打ち聞く」という動詞の場合は、「うち」が接頭語となり、「ちょっと聞く、ちらりと聞く」という説明がされる²。何か関心のあることを耳にする、そしてそれを記録する、という内容であることはすぐにわかるが、その関心のあることが主に歌であることが重要な点になるだろう。「打聞」と聞いて即座に想起するのは、『打聞集³』である。平安末期の仏教説話集として中国やインド、日本を舞台として収録したもので、現存する巻で判断する限り、すべての内容は歌に限定するとはいえない。しかし、次にあげるように、「打聞」については時代を下って『二根集』、『梁塵秘抄口伝集』などにみることができる。

- ・『二根集』 荒木田守平の歌集

「撰集ノ時、先、哥を書あつむるを、うちぎと云」

- ・『梁塵秘抄口伝集』

「詠む歌には、髓脳・打聞などいひておほくありげなり。今様には、いまださることなければ、俊頼が髓脳をまねびて、これを撰ぶところなり」

- ・『正徹物語』

「家々に皆打聞とてその頃の歌をあつめて集をつくりしなり」

これらの作品からは当時の歌を集めたものを「打聞」といつていたことがわかる。歌集のような役割を担っていたのである。院政期頃には「家の集」を私家集、「うちぎき」を私撰集といつていたことが知られているように、「打聞」が歌に関わることは後の資料でもわかつう。

² 『日本国語大辞典第二版第二巻』（小学館、2001年）。

³ 『打聞集』長承三年（一一三四）以前成立の仏教説話集。下帖一卷だけが残る。編著者未詳。『今昔物語集』『宇治拾遺物語』と内容の重複が目立つ。

次に「打聞」の初出である『枕草子』の中から「うれしきもの」をみていく。「うれしきもの」は読みたいと思っていた物語に出会った時の嬉しさ、探し物を見つけ出した時の喜び、勝負事に勝った時の嬉しさなど、些細な出来事に嬉しさを見出す章段である。

もののをり、もしは、人々言ひかはしたる歌の聞えて、打聞などに書き入れらる。みづからの上にはまだ知らぬ事なれど、なほ思ひやるよ。いたううちとけぬ人の言ひたる古きことの、知らぬを聞き出でたるもうれし。後に、物の中などにて見出でたるはただをかしう、「これにこそありけれ」と、かの言ひたりし人ぞをかしき。

一行目の「もののをり、もしは、人々言ひかはしたる歌」とは、「しかるべき折りに詠んだ歌、あるいは、人々が贈答した歌」と解釈でき、歌を打聞として書き留められるのが嬉しいとある。しかし、そのような経験は清少納言にはまだなく、きっと嬉しいだろうと推測している文である。続いて、それほど親しくしていない人が放った詩歌で、その詩歌を知らないので誰かに聞いて、しばらくしてそれらを何かの書物で見つけたのは面白いとある。人々とのやり取りを通して、耳から入る情報を記録する覚書のようなものを「打聞」としていることがわかっていく。

江戸時代に書かれた『枕草子春曙抄』は「打聞」の注で「聞書の事のよし、徹書記の説にあり⁴」と、先述した『正徹物語』をあげて「打聞」の説明をしている。現代の諸注釈書では、

- ・『新編日本古典文学全集』（小学館）「「打聞」は耳に聞いたままを記す覚え書。多くは歌や歌にまつわることなどを書き記した」
- ・『新日本古典文学大系』（岩波書店）「人から聞いた話や歌を書きとどめることが「打聞」。興味をひかれ価値を認めたものを記しとどめるものだから、書かれる方は快い」
- ・『新潮日本古典集成』（新潮社）「聞書、備忘録」

⁴『枕草子春曙抄』（枕草子古註釈大成、1978年、日本図書センター）641ページ。

- ・『新版枕草子下巻』（角川文庫ソフィア）「人から伝聞した歌などを書き留めておく備忘録」

とある。総合的な解釈としては、「打聞」は備忘録として人から聞いた歌や話を書き留める行為となる。

萩谷朴『枕草子解環』では、

うちぎ> 打聞。聞書、備忘録。当時は、世間で評判になったような出来事を、各人が手控えに書きとめておいて、それを各人が互いに交換して情報を流すといった、一種のミニ・コミュニケーションが行われていたのであろう。他人の打聞を目にすることがなければ、このように、自作の和歌が打聞に書き留められているということを知る由もないからである。和歌の撰集とか説話集などの資料源、情報源として、こうした打聞が利用されたということも、文学史の上で、一つの研究題目となろう⁵。

と、情報伝達として「打聞」が重要な情報源になったと述べている。たしかに「うれしきもの」にみられたように「打聞などに書き入れらるる」のが嬉しいというのであるから、個人的な備忘録という類ではなく、ある程度人の目が行き届くような開放的で融通のきく行為であったことがわかつたであろう。備忘録というとか何かをメモ帖に忘れないように記録しておくという個人的な行為となるが、「打聞」とは印象に残った歌を記録して、それらを共有することが可能な公の行為であったと思われるのである。「打聞などに書き入れらるる」のが「うれしきもの」であるのは、誰かの評価を得ることが出来る喜びを得られるからであろう。以上、「うれしきもの」から大まかな「打聞」を想定してきたが、さらに「打聞」の働きについて考察していく。

3、「打聞」となった和歌

ここでは和歌が作られる状況に着目して、その和歌が「打聞」となるまでの環境について考えていきたい。『枕草子』の章段「小原の殿の御母上とこそは」（二八八段）は、ある和歌が「打聞」である瞬間を捉えている場面である。

⁵ 萩谷朴『枕草子解環四』（一九八三年、同朋舎出版）による「うれしきもの」〔語釈〕539ページ。

小原の殿の御母上とこそは、普門といふ寺にて八講しける、聞きて、またの日、小野殿に人々いとおほくあつまりて、遊びし、文作りてけるに、薪こることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄はここに朽さむとよみたまひたりけむこそいとめでたけれ。ここもとは打聞になりぬるなめり。

「小原の殿の御母上」とは藤原道綱母のことだと言われている。法華八講聴聞後、管弦や作詩をする人々に混じって、道綱母も歌を詠む。『法華經』提婆達多品の「薪を拾い、食を設け」阿私仙人に仕え法華經を得た釈尊の故事と、碁を山中で見ると「斧の柄」も朽ちてしまったという晋の故事を踏まえて、すでに薪を切って仏にお仕えする法華八講は終わってしまったのだから、不要な斧の柄は「小野」で腐らせようと、十分な時間があるのだから、ゆっくりとくつろぎましょうという内容になっている。文末の「ここもとは打聞になりぬるなめり」とは、清少納言の経験ではなく、この和歌が「打聞」から得たものであることを説明、もしくは弁解するような語り方である。道綱母が詠んだ歌は「打聞」としてある人脈の中で流通しており、それらを見る機会のあった清少納言が、『枕草子』にあげたということになるのである。「打聞」からの情報であることをあえて記述するほど、「打聞」という行為が世間に周知されていたという証拠にもなるだろう。

また、この章段は歌だけでなく歌が詠まれる状況について説明している。法華八講後ということから『法華經』を踏まえた和歌がよまれた。「打聞」とは歌だけを記すのではなく、歌が誕生した状況も同時に記録していたのだろうか。「打聞」という実物を目にすることがないため、ここは想像するしかないが、「打聞」といわれる行為が当時において聞知されていたことがよくわかる。

4、『源氏物語』の「打聞」と「歌語り」

「打聞」は「歌語り」と同じ場で使われる場合もある。双方の働きは同じなのだろうか、それとも異なりがみられるのだろうか。「歌語り」とは平安になってからみられる言葉で、『源氏物語』3例、『紫式部集』1例、そして『枕草子』の用例しかない。まず、『源氏物語』「常夏」巻からみていきたい。

〈引用部分の場面紹介〉内大臣は近江の君を訪れ、不器量で軽々しい近江の君を、弘徽殿女御のもとに女房として出仕させようと本人に伝える場面。近江の君は無邪気に喜び、羽目を外して得意になっておしゃべりをする。

ただいと鄙び、あやしき下人の中に生ひ出でたまへれば、もの言ふさまも 知らず。ことなるゆゑなき言葉をも、声のどやかにおし静めて言ひ出だしたるは、うち聞く耳ことにおぼえ、をかしからぬ歌語をするも、声づかひつきづきしくて、残り思はせ、本末惜しみたるさまにてうち誦じたるは、深き筋思ひ得ぬほどの、うち聞きにはをかしかなりと耳もとまらかし。

ここでは「うち聞く」「うち聞き」と「歌語」が一緒に使われている。内大臣は不器量で軽率な近江の君を、弘徽殿女御のもとに女房として出仕させようと本人に伝える。簡単に現代語訳をしてみると以下のようになる。

田舎びた育ちのおかげで、ものの言いようも知らない。これというほどの言葉も、ゆったりと落ち着いて静かに口にした場合、ふとそれを耳にしてもとりわけよく聞こえるものだし、おもしろくない歌語りをするにも、声遣いを歌にふさわしく語って余情をもたせ、初めや終わりをばかして聞こえないくらいにしてかすかに口ずさんだりすると、深い内容はつかめないものの、ちょっと聞いたところでは、おもしろいと心をひかれるものである。

この部分がおもしろいのは、たいした言葉でなくても、落ち着いて静かに話せばよく聞こえるということ、おもしろくない歌語りでも声遣いを工夫して余情を持たせて、おぼろげに発声すれば、心ひかれるものがあるということである。内容よりも発声の仕方が重要で、滑舌の明確さを求めず、雰囲気醸し出すのが良いというのである。このような語りが展開されるのは、近江の君があまりにも早口で意味がつかめないからである。たとえ、深い内容の話でも、うわずった声遣いで、訛った物言いをするのでは品位が落ちるということを言いたいのである。品位とは姿・形、身振り、筆跡、話しぶり、総じてその人の全人格がにじみ出るものである。

声遣いということが何度も強調されるように、ここでの「打聞」はちょっと耳にする、という意味で使われており、「をかしからぬ歌語」をめぐるやり取りとなっている。「歌語り」の具体的な内容はわからないが、声遣いが問題になっていることから、歌を声に出しながら語っていたことを想像できる。聴覚

が問題視される環境だからこそ、ちょっと聞くという意味で「うち聞く」「うち聞き」という表現が使われているのである。『枕草子』では歌を記録するという意味で使われていた「打聞」であるが、ここでは先述した辞書的な意味で最初にみられた「偶然耳にすること、またその言葉や話」としての「打聞」がみられるのである。

一方で「賢木」巻は源氏が参内して、朱雀帝と語り合う場面である。

「賢木」巻

〈引用部分の場面紹介〉桐壺院の崩御後、源氏は参内して朱雀帝と語り合い、今昔の物語をする。

よろづの御物語、書の道のおぼつかなく思さることもなど問はせたまひて、またすきずきしき歌語なども、かたみに聞こえかはせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたまふに、我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙もみな聞こえ出でたまひてけり。

うち解けてよもやま話をするうちに、漢籍についての疑義、批評感想などを交わし、その後に「すきずきしき歌語」といった歌にまつわる恋愛話に展開する。この後、帝と齋宮との思い出話に展開して、思いがけず源氏も御息所のことを話し出す。どちらも、どのような歌が交わされたかは具体的には文章には記されずわからないが、「歌語り」を契機として、様々な感情が生み出される箇所である⁶。

以上のように、『源氏物語』の「歌語り」は具体的に何を話したかは明確にはならない。「歌語り」という言葉があることから、歌をめぐる会話が成立したのだと、我々は判断するしかない。注目すべき点は、『源氏物語』の用例では「歌語り」をする人物が限定されていることである。「賢木」巻では源氏と帝の「歌語り」、「常夏」巻では近江の君をめぐる「歌語り」。今回はあげなかったが、「宿木」巻では弁の尼と薫との「歌語り」になる。登場人物が存在して物語が展開する『源氏物語』の特質から考えて、「歌語り」をする人物が明確になるのは当然かもしれない。しかし、「歌語り」をする内容がわからな

⁶ほかに宿木巻にも「歌語り」という言葉がみられるが本論では引用は割愛した。

くても、その場に登場する人間関係によって読者は何を語っているのか想像することができるのが特徴である。例えば、「賢木」巻では「すきずきしき歌語」なども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの斎宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたまふ」と、「すきずきしき歌語」を契機として、帝は斎宮のことを語り出す。ここで読者は、斎宮に別れの櫛を差し、思わず落涙した帝の深い悲しみを追憶することが可能となる。『源氏物語』の「歌語り」は歌をうたうということが重要ではなく、特定の人間関係の語りのなかで、そこに付随するエピソードを喚起する働きを持ち合わせているのである。

5、『紫式部集』の「歌語り」

次に、「歌語り」を契機として詠まれた和歌を『紫式部集』からみえる。

わずらふことあるころなりけり。「かひ沼の池といふ所なむある」と、人のあやしき歌語りするを聞きて、「こころみに詠まむ」といふ夜にふるになどかひ沼のいけらじと思ひぞ沈むそこは知らねど

(現代語訳 世の中に生きていくのに何の甲斐があろう。もう生きてはゆくまいと思い沈んで、そのかい沼の池に沈もうと思います。池の底がどんなところなのかわかりません。)

また、心地よげにいひなさむとて心ゆく水のけしきは今日ぞ見るこや世にかへるかひ沼の池

(現代語訳 心が晴れ晴れするような池の景色を今日は見ました。これが 捨てたこの世に立ち帰る甲斐のあるという、あのかい沼の池なのですね。)

紫式部が病床にあるころ、具体的な人物は未詳だが仕えている女房のひとりが、「かひ沼の池」という場所について珍しい話をしているのを耳にする。「あやしき歌語り」をする、その「歌語り」に触発されて、式部は「こころみに詠まむ」と和歌を詠む。式部のあまりにも暗い歌からみて、誰かが入水自殺でもしたかのような内容の歌である。病床の身にはふさわしくない「歌語り」だったかもしれないが、歌をよむことで前向きな思考を取り戻して、二首目では晴れやかな歌を詠む。ここでは歌の詠まれた事情と歌が詠まれる過程がよくわかる。

清水好子は、「歌語り」とは「歌のやりとりというよりは一人の作者に焦点があてられ、その作者の置かれた特殊な情況、それによって詠まれた歌にいわば均等の価値が置かれて、鑑賞されていた、と考えるべきであろうか⁷」と説明している。氏の意見には同感であり、『紫式部集』の「歌語り」をみるかぎり、あるエピソードがあり、その状況を色づけるために、もしくは追憶を深めるために、「歌語り」があるのだと考えられる。『伊勢物語』や『大和物語』のように、歌が中心になって物語が展開していく「歌物語」ではなく、歌をめぐるエピソードがやんわりと物語に取り込まれるのが「歌語り」だといえるのではなかろうか。その意味でも「歌語り」は「歌物語」とは異なるものとして判断しなければいけないと考える。

6、『枕草子』の「歌語り」

続いて『枕草子』の語りの場をみていく。「歌語り」という言葉はみられないが、語り合う場を想像できる章段としてまず「心ゆくもの」をあげる。「心ゆくもの」は気持ちがいよものを羅列する章段である。

「心ゆくもの」（二九段）

夜寝起きて飲む水。つれづれなるをりに、いとあまりむつまじうもあらぬまらうどの来て、世の中の物語、このごろある事の、をかきしも、にくきも、あやしきも、これかれにかかりて、おほやけたくしおぼつかなからず、聞きよきほどに語りたる、いと心ゆく心地す。神、寺などに詣でて、物申さするに、寺は法師、社は禪宜などの、くらからずさはやかに、思ふほどにも過ぎて、とどこほらず聞きよう申したる。

夜、寝起きに飲む水が爽快であるという文章に続く。何ともない気分の折りに、たいして親しくないわけでもない客が来て、世間話を、このごろの出来事の、おもしろいのも、にくらしいのも、おかしいのも、公私にわたってすべてに通じ、聞きにくくない程度に話して聞かせているのは、大変満ち足りた気持ちがあるとある。波線部「いとあまりむつまじうもあらぬまらうど」というように、特に親しくない人であるため、差し障りのない話をするので十分であるということだろう。現代でいう立ち話で済ませることができるよう簡単な世

⁷清水好子「「歌語り」の実際」（『平安文学論集』風間書房、1992年）32ページ。

間話の類である。何か一つのテーマについて熱く語り合うようなものではない。自分の言いたいことだけを話して満足する気の置けない雑談である。

次は宮仕えをしている女の家が舞台である「歌語り」の例である。この章段以下、「歌語り」の例を続けてあげるため、Ⅰ～Ⅲの印をつけた。

Ⅰ「宮仕へ人の里なども」（一七二段）

夜中、暁ともなく、門もいと心かしくももてなさず、何の宮、内わたり、殿ばらなる人々も出であひなどして、格子なども上げながら、冬の夜をみ明かして、人の出でぬる後も見出だしたるこそをかしけれ。有明などは、ましていとめでたし。笛など吹きて出でぬる名残はいそぎでも寝られず、人の上ども言ひ合はせて、歌など語り聞くままに寝入りぬるこそをかしけれ。

その家に客人が来て、帰った後のこと。眠れないので人の噂をしたり、歌などを話したり聞いているうちに、寝入ってしまうという場面である。どのような歌であったかはわからない。

同じく資料Ⅱも宮仕えする人々の集まりの場であるが、理想論的に描いた章段である。

Ⅱ「宮仕へする人々の出であつまりて」（二八四段）

宮仕へする人々の出であつまりて、おのが君々の御事めできこえ、宮の内、殿ばらの事ども、かたみに語り合はせたるを、その家主にて聞くこそをかしけれ。家ひろく清げにて、わが親族はさらなり、うち語らひなどする人も、宮仕へ人をかたがたにすゑてこそあらせまほしけれ。さべきをりは、一所にあつまりゐて、物語し、人のよみたりし歌、なにくれと語り合はせて、人の文など持て来るも、もろともに見、返事書き、またむつまじう来る人もあるは、清げにうちしつらひて、雨など降りてえ帰らぬも、をかしうもてなし、まゐらむをりは、その事見入れ、思はむさまにして、出だしたてなどせばや。よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。

理想の内容としては、宮仕えする女房たちを広くて綺麗な家に集めて、その世話をしながら、女房が仕えている人々の情報を得たいという。しかるべき折には、一箇所に集まって座って、話をしたり、人の詠んだ歌、何やかやとじっくり話をして、その宮仕え人のもとに手紙がくるのも一緒に見て、返事を書

き、また親しくしている男性が来る場合にも丁寧に応え、雨などが降って帰宅できない場合でも、快くもてなし、参上するさいにも、そのお世話をしたいとある。この場面は傍線部「人のよみたりし歌、なにくれと語り合はせて」とあるように、誰かが詠んだ歌に対して批評や評価をしている様子で、躍動感あふれる「歌語り」の場を理想化している。

次の章段は、雪の降る夕暮れに火桶を囲んで二、三人が話をしていると徐々に外が暗くなる。しかし、火を灯さないでいると、その闇の中に雪の光が白く輝く、そのような幻想的な瞬間を捉えた場面である。真夜中頃に足音がしてそれほど親しくはないが疎遠でもない人がやってきて、一緒に世の中のことにについて話し合う。

Ⅲ「雪はいと高うしも降らず」（二二一段・前田家本）

宵は過ぎやしぬらむと思ふほどに、忍びやかなる沓の音のすれば、「誰ならむ」とて、ものをいひやみて聞けば、いとうたくもあらず、又あまりむつまじうもあらず、例もかやうなるをりは、ふとさし出づる人なりけり。簾の前にわらざさし出でたれど、わざとものぼらず、なからは、しもながら物語などす。このごろ世の中にきこえける事どものあはれなるもをかしきも、また歌がたりなども、さまざまのどやかにしかはす。かたみによしあしも聞きわき、かつは又たはぶれ事もいひて、をかしき事はうち笑ひなども、ことにしたがひていひかはすほどに、かりそめと思ひしほどに、冬の夜も明け方になりけり。

傍線で示した「あはれなるもをかしきも、また歌がたりなども」は、様々なことを、そしてその中に「歌がたり」も含まれるが、世の中で耳にした出来事について「よしあし」を判断したとある。

『枕草子』にみられる「歌語り」では人々が集い、あれこれと批評や評価をする様子が描かれていた。集う人物についてもⅠ「宮仕へ人」、Ⅱは波線部「宮仕へする人々」、Ⅲも波線部「いとうたくもあらず、又あまりむつまじうもあらず、例もかやうなるをりは、ふとさし出づる人」とあり、お互い適度な付き合いを可能とする人であることがわかる。親密な仲ではないが、情報交換をしたり、円滑な人間関係を築くうえで、重要な人物となりうる人である。そのような人が集まる場では歌への批評や評価が始まる。

7、歌への批評と評価

先の『枕草子』では歌への批評や評価がみられた。ここでは『大和物語』から二話をあげて、歌が語り継がれていく過程をみていく。

『大和物語』「ちぢの色」三

さて、二月ばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家にありけるを折りて、あをやぎの糸うちはへてのどかなる春日しもこそ思ひいでけれとてなむやりたまへりければ、いとになくめでて、のちまでなむ語りける。

『大和物語』「をみなへし」二九

故式部卿の宮に、三条の右の大臣、こと上達部など類してまゐりたまうて、暮うち、御遊びなどしたまひて、夜ふけぬれば、これかれ酔ひたまひて、物語し、かづけ物などせらる。をみなへしをかざしたまひて、右の大臣、をみなへし折る手にかかる白露はむかしの今日にあらぬ涙かとなむありける。こと人々のおほかれど、よからぬは忘れにけり。

これらは物語文末に、傍線部で示したように、「いとになくめでて、のちまでなむ語りける」や「こと人々のおほかれど、よからぬは忘れにけり」とあり、歌への評価がされたことがわかる。先ほどの『枕草子』には具体的な歌はなかったが、何らかの事柄について人々が集って話し合い、「よしあし」（第6節資料Ⅲ）を決めるとあった。このような『枕草子』の世界が、『大和物語』では歌をめぐる物語となって歌への評価を下すようになる。歌と物語、そして歌の評価という三つが一揃いとなった形式が、『大和物語』のような作品となるのである。

南波浩は以下のように述べている。

「歌語り」を後の資料として残すために筆録して「打聞」とする（『枕草子』うれしきもの）。

また、歌に重点を置き、歌の記録という性質が強くなると、「私撰集」ともなり、素材の時間的推移に重点が傾斜してゆくと「歌日記」のようにもなる。また、ある者は、それらの「打聞」

を集録しようとする。『大和物語』はこの流れの成果であり、それは「歌語り集」であり、「打聞集」ともいうべきものであった⁸。

先述したように『枕草子』では、「歌語り」をするさいに、評価や批判が伴ったことがわかった。その結果、大勢から良いと評価されたものが「打聞」になったのである。「歌語り」と「打聞」とは密接な関連性があるのである。

最後に清少納言自身の歌が、宮中で評判になり、人々に伝播していった例をみてみたい。

「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」（七八段）

物語などしてゐたるほどに、「まづ」と召したれば、まゐりたるに、この事仰せられむとなりけり。上笑はせたまひて、語りきこえさせたまひて、「男どもみな扇に書きつけてなむ持たる」など仰せらるるにこそ、あさましう、何の言はせけるにかとおぼえしか。

根も葉もない清少納言の噂を聞き、本人との接触を避けていた藤原斉信から、手紙が届く。それに清少納言は中宮定子の力を借りず、漢籍を踏まえた見事な返答をする。その内容が宮中に知れわたり、人々はその返答を口ずさんだりして、最終的には傍線で示したように、「男どもみな扇に書きつけてなむ持たる」と評判になったとある。この章段はまさに人々の評判を得ることができ、扇に書きつけられた「打聞」として、宮中に広まった例になるのではなかろうか。

『枕草子』研究のなかで、上述は「自讃談」と言われている章段のひとつである。「自讃談」とは、ある問いに対して清少納言が機知に富む答えを返し、そのため清少納言が賞賛されるという場面が、中心を占める章段群のことである。しかし、「自讃談」という呼称は問題を孕んでおり、その点についてはすでに述べた⁹。

今回あらためて「打聞」の視点から考えてみると、評判になった返答は、大勢の評価を得て良いと受け入れられた歌であり、だからこそ扇に書き留められたのである。賞賛された行為をあえて『枕草子』に記述するため「自讃談」と

⁸ 南波浩「歌語り・歌物語の特質」（『日本文学講座4 物語・小説Ⅰ』大修館書店、1987年）47・48ページ。引用部にある「歌日記」というのが何を指して述べているのかは疑問である。

⁹ 拙稿「『枕草子』—「自讃談」をめぐる覚え書—」（『立教大学日本文学第85号』2001年1月）

受け止められてしまう恐れが生じてしまうのだろうが、「打聞」として人々に伝播していく一例とみることができるのではなかろうか。批評や賛美をされることは特別なことではない。自讃として捉えるのではなく、ある意味「打聞」として広まった歌があげられただけだと考えることができるのである。「自讃談」については「打聞」というテーマと関連づけて再考する可能性があると思われる。

8、おわりに

『枕草子』「うれしきもの」の「打聞」を起点として、「打聞」とは印象的な歌を記録して、それらを仲間たちと共有するものであることがわかった。歌集になる前の前段階といったものだろうか。「打聞」を積極的に行っていた人とは、歌に興味があり、人から耳にした歌から新たな着想を得ようとしていた人物であったことが想像できる。創作や思索などの過程において、「打聞」という行為があったことは、あまりよく知られていない。歌を創作するうえで「打聞」が重要な任務を持っていたことを強調しておきたい。

「打聞」と一緒に使われることのあった「歌語り」については、『源氏物語』、『紫式部集』、『枕草子』の「歌語り」用例を確認した。『源氏物語』では『枕草子』や『紫式部集』とは異なる使い方をしていたことがわかった。「歌語り」の質が異なるといえようか。『源氏物語』の「歌語り」は声が重視されたり、「歌語り」が登場人物の会話を盛り立てたり、と「歌語り」の内容よりも、その場の雰囲気や「歌語り」が導く働きを担っていた。本来「歌語り」は、『枕草子』にみられたように歌をめぐる様々な会話が展開されて、批評や評価を伴うものだったと思われる。『源氏物語』は「歌語り」そのものを重要視するのではなく、「歌語り」の働きを物語に取り込み、登場人物の会話を豊満にしていたのだと思われる。

『枕草子』の「歌語り」は、誰かが詠んだ歌について皆で批評をするものとして捉えられていた。批評や賛美を受容する姿勢は『枕草子』の「自讃談」を再考する可能性も秘めていた。当時において歌とはひとり心に留めるものでは

なく、口ずさんだり、批評を伴ったりと、躍動感あふれる創作活動であったのだと考えられる。

【使用テキスト一覧】

- 『二根集 上』（奥野純一編、古典文庫、1974年）
「梁塵秘抄口伝集」（『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』新編日本古典文学全集、小学館、2000年）
「正徹物語」（『歌論集 能楽論集』日本古典文学大系、岩波書店、1960年）
『枕草子（三卷本）』（新編日本古典文学全集、小学館、1997年）
『枕草子（能因本）』（日本古典文学全集、小学館、1974年）
『源氏物語 ② ③』（新編日本古典文学全集、小学館、2000年・2004年）
『紫式部日記 紫式部集』（新潮日本古典集成、新潮社、1995年）
『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（新編日本古典文学全集、小学館、1999年）

【参考文献】

- 天野紀代子「和歌からの離陸—『枕草子』の形態—」（『日本文学誌要40号』1989年2月）
雨海博洋「打聞きの世界」（『物語文学の史的論考』桜楓社、1991年）
古橋信孝「歌語り」（『国文学解釈と教材の研究』1995年7月）
雨海博洋「歌語りと打聞き」（『文学・語学』1996年6月）
中田武司「歌語りと説話断片—枕草子の創造—」（『歌語りと説話』新典社、1996年）
雨海博洋「歌語りの芸能性」（『平安朝文学研究』1999年11月）
飯塚浩「歌語りとその場序説—伝承と創造—」（『平安文学研究8』1999年11月）
渡邊裕美子「和歌史の中の『枕草子』」（『平安文学をいかに読み直すか』笠間書院、2012年）